アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品：ヱヴァンゲリヲン　新劇場版　Q

その 7

今回のテーマ

反復強迫の苦しみ

　愛する対象を失う不安が強まれば強まるほど自我はますます対象を救おうと切望し、修復のタスクが困難であればあるほど、超自我に関連した要求がますます厳格さを帯びる（メラニー・クライン）

前回のおさらい

　新劇場版　破　ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終った。しかしシンジの起こした行動は、それはシンジが綾波の喪失を受け入れられず、躁的な心性によって起こしたものだと考えられる。その幸福な世界は幻想であり、その中で排出された悲哀は必ずふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体

験される。

　今回のエヴァ Q において、これまでシンジが排出してきた相次ぐ喪失（綾波の喪失だが、これは思春期の喪失の感情でもある）という心の痛み、悲哀が再び回帰し、シンジ自身がニアサードインパクト起こしてしまった現実に直面し、苦悩し、もがき続ける様を描いている。

　一般的に現実に起きた苦悩や悲哀を受け入れていくには、自身の持つ愛の中にいかに収めていくかということが大切である。そのなかで徐々に「こころの痛み」を受け入れていく。

　それにはシンジを取り巻く人々がシンジの思い（苦悩）を受け止めていく対象であり環境が必要不可欠である。

　しかし Q ではその対象が皆無に等しくなっている。その理由として、暴走してしまったシンジはニアサードインパクトを起こし、周囲を非常に苦しめてしまった。それゆえシンジに対して彼を取り巻くヴィレの人々は怯えと憎しみ、怒りの感情を抱いている。今まで親しくしていたミサトも、アスカも怒りと猜疑心

を向けており、14 年の眠りから目覚めたシンジは、何が起きているのか全く掴めず、非常に戸惑い、良い対象を求めて、綾波と共に NERV に向かうも、綾波も以前のような綾波ではなく、シンジの心を受け止める（コンテインする）器になっておらず、綾波が全く空っぽの様な存在になっている。

誰も自分を受け止めてくれる対象がおらず、強い孤独と迫害的な思いをシンジは抱いていた様に感じられる（妄想分裂ポジションの心性）。

４．渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

今まで親しい存在だと感じていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波すらも自分を守ってくれる良い対象にならなくなっていると感じているシンジは、強い孤独を感じていたと感じてした。そのなか、渚カヲルと出会う。

庵野監督は「（カヲルは）もうひとりのシンジですから。理想のシンジ」と述べている様にカヲルを理想化された対象として描いている

彼はシンジをピアノの連弾に誘い出す。

　カヲルが弾くピアノにぎこちない感じで入っていたシンジだが、徐々に水を得た魚のようにイキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

連弾で音楽を作ることは深いコミュニケーションとも言える。

前回はそのことで木村敏の「あいだ」の考えを用いて、連弾の深いコミュニケーションの意味について述べた。

木村敏の「あいだ」について

　人は主体と対象が互いに独立しているのではなく、(主体と対象の)「あいだ」という場で相互に作用し合い、新たな意味を見出す。そして私たちが対象とつながりを形成していると感じられる、ある種の感覚（共通感覚）
→例えとして、音楽の合奏を木村は挙げている。

　演奏家は自身でこう弾きたいという思いで演奏する（主体的に演奏に関わる)。他者もその思いで演奏する。つまり各々が自分の思いをぶつけて演奏しているにも関わらず、演奏者達の奏でる音が一体となって、音楽を作り出す空間。

　人と人とのコミュニケーションで「場が盛り上がる」感覚

→ウィニコットのいう「遊び」の場や「潜在空間」と似た考えとも言える

カヲルとシンジの連弾の中でカヲルは「音が楽しい。二人ってすごいね」と言っているが、これはカヲルとシンジが音楽を通じで主体的関わり、交わり一つの音楽を作り出している。つまり「あいだ」でイキイキとした情緒交流が行われていることを意味する。

「あいだ」を作り出すことは「うまく弾く」ことではない。自身が主体的に音楽に関わることであり、それは演奏するシンジ自身が「気持ちのいい音をだ」すことである。

ある意味、カヲルはピアノの連弾で「あいだ」を共有することで、シンジが他者と深く繋がっていることを体感させている。それは目覚めた後、これまでずっと孤独であったシンジの心の癒しとなった様に感じられる。

→それはシンジが現実と関わり深く知ろうとするきっかけとなる。

シンジが現実を知るということ。

～妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行することの辛さ～

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、その中で偶々支給されてきたシャツに鈴原トウジ書かれたタグをみて、シンジは衝撃を受ける。そして自身が長い間現実から隔絶されていたことを痛感し、怖くなり、現実に向き合おうとする覚悟を決めたが、ニアサードインパクトのあまりの惨状にシンジは強いショックを受け、「罪だなんて……何もしてないよ！僕は関係ないよ！！」必死に否認する。

一般的に現実を知り、その惨状に衝撃を受けながらも自責感や罪責感という抑うつ的な心の痛みを受け入れ、人は抑うつポジションとなり、思いやりの心を持ち、人として成熟していくが、シンジの場合、あまりの衝撃ゆえにその現実が受け入れられなくなり、再び現実から遠ざける心の過程に陥り、妄想分裂ポジションに回帰してしまっている。

カヲル「ただ、償えない罪はない。希望は残っているよ。どんな時にもね」というが、どんな辛いことでも、失望でも、喪失は受け入れられること、それは妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行は必ずできることを言っている様に感じられる。

→しかし何か観念的で空疎な理想論の様にも聞こえる。

現実を受け入れられず苦悩するシンジにカヲルはどの様に関わっていったのか？

　現実を受け入れられずに、一人、苦悩し続けるシンジ。そこにカヲルが現れ、シンジと一緒にエヴァに乗ることを提案する

　カヲルに一緒にエヴァに乗ることを提案に対して、シンジは当初、カヲルが再び過酷な現実を直面させ、自分を再び絶望の淵に追いやろうとしていると迫害的に感じられたと考えられる。しかしシンジの DSS チョーカーをカヲルが外したことで、シンジはカヲルに心を開き、エヴァに乗ることを決意したものと考えられる。そしてシンジは一転してカヲルを強く盲信してしまう。カヲルを理想化したよい対象と捉え、周囲の迫害的な対象から、自分の心を守る様にカヲルと一体化し、シンジは妄想分裂ポジションの中で自己愛的殻を強化している様に感じられる。

　カヲルはなにか非常にもっともなことをいっているが、何か胡散臭さを感じさせるのはその点と考えられる。カヲルはシンジの苦悩や絶望を受け止めるのではなく、カヲル自身が思い抱いている方向にシンジを導かせており、洗脳の様に感じられる。元にシンジの心は妄想分裂ポジションにとどまったままであり、シンジはカヲルを理想化し、カヲルと一体化し、苦痛に満ちた状況を否認する形になっており、ある種これは躁的防衛となっている。（クラインは理想化が躁的ポジションに本質的なものであると述べている。）

→破の最後の様なことを繰り返し、シンジの心ははより深く傷ついていく予兆の様にも感じられる

５）槍を抜くことに躊躇してしまうカヲルにシンジはどの様に感じたのか

シンジと一緒にエヴァ 13 号機に乗ったカヲルだが、リリスの躰に刺さっている槍の形状が変化していることに気がつき、作戦実行を躊躇う。

そこでのシーン

カヲル「ちょっと待って、変だ」

　カヲルは顎に手を当てて何かを考えている。

シンジ「どうしたのカヲル君？」

カヲル「おかしい、二本とも形状が変化して揃っている」

　しかし、シンジは先を急ごうとする。

シンジ「早く槍を抜こうよ。そのためにエヴァに乗ってきたんだから……」

　突然、背後で爆発が起きる。爆発で生じた衝撃で 13 号機がよろめく。

シンジ「うわっ！」

シンジ「なんだよこれ！？」

　襲来してきた機体は赤く、シンジは意外な相手の襲来に気付く。

シンジ「改 2 号機！アスカ！？」

改 2 号機は度重なる攻撃をエヴァ 13 号機に対して行い、どうにか AT フィールドで弾き返す。

シンジ「何すんだよ！アスカ！」

アスカ「バカシンジ！あんたまさかエヴァに乗ってんの！？」

シンジ「そうだよ、エヴァに乗って、世界を変えるんだ！」

アスカ「ガキが……だったら乗るな！！」

（省略）

シンジ「なんで邪魔するんだアスカ！あれは僕たちの希望の槍なんだよ！？」

アスカ「あんたこそ！余計なこと！するんじゃないわよ！ガキシンジ！またサードインパクトを起こすつもり！？」

シンジ「違う！槍があれば、全部やり直せる。世界が救えるんだ！」

アスカ「……ホントにガキね。…分からず屋！」

（省略）

カヲル「やめようシンジ君。嫌な予感がする」

シンジ「駄目だよカヲル君！何のためにここまで来たんだよ！」

カヲル「もういいんだ。あれは僕らの槍じゃない」

シンジ「僕らの槍じゃないって……槍が必要だって君が言ったんだ。だから僕

は、エヴァに乗ったんだよ！」

　13 号機は、リリスの大きな体によじ上って槍に近づいていた。シンジは、カヲルの言うことを聞かず、カヲルと繋がっていた機能を断ち切り、独断で目的を果たそうとする。

シンジ「操作系が！」

　エヴァの目の光が赤色に変わった。

シンジ「カヲル君のために、みんなのために槍を手に入れる。そうすれば世界は戻る！そうすればミサトさんだって！」

（略）

カヲル「駄目だシンジ君……！」

　カヲルは蒼白した顔面でシンジを見た。

アスカ「やめろ！バカガキ！！」

シンジ「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

シンジはリリスの体に突き刺さった大きな槍を引き抜くと、それを頭上にかざして交差させる。シンジは目的をやり遂げたことで、達成感のある表情を見せ

た。

【考察】

→自身で犯した罪や苦悩を受け入れられず、カヲルやアスカの制止を全く聞き入れず、槍を抜いてしまう。シンジは理想化された良い対象と一体となる幻想を抱き、そのなかで自己愛的殻に閉じこもり、自分が盲信していたものしか信じられなくなってしまう。そしてシンジは槍を抜くこと（奇跡を起こそうとすること）ばかりに固執してしまい、それが世界を救う唯一の方法だと信じ込んでしまう。それは万能的な存在（万能空想）になることで、苦しみから逃れようとする心性（躁的防衛）の様に感じられる。これは「破」最後の綾波を助け出すシーンで見られたような、喪失に伴う抑うつ的感情を自身で受け止めきれず、犯してしまった過ちとなんら変わらず、反復強迫の様にも感じられる。

　つまり、シンジはこの時点では、カヲルが提示した「今、大切なこと、何よりも希望。そして贖罪と心の余裕」という思いを歪んだ形で受け止めてしまったのではないだろうか。そして二本の槍の形状の変化（歪み）というものが、そのシ

ンジの認識の歪みの象徴である様にも感じられる。

６）槍を抜き、思い描いていたものと異なり、排出されてきた悲哀がふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験されるまで

　槍を抜くことでシンジは世界が救えると思い込んでしまう。そのことに加え、周囲を迫害的に捉え、誰の制止も受け入れず、槍を抜くことに固執し、それを遂行してしまう。ある種未熟な行動であり、アスカが何度も「バカガキ」と言いたくなる気持ちも解らなくはない。しかし槍を抜き、フォースインパクトが起ころうといている状況を目の当たりにしてシンジは自分のしたことに直面しする。

シンジ「なんだこれ……」

天高く舞い上がったエヴァの頭上から光の輪が広がり、空一面を赤い波紋で包み込んで行った。

シンジ「なんなんだよこれ……」

　朽ち果てた地上の街並の崩壊。至る所に断末魔のような人々の叫び声が聞こえる。地表の下から姿を現した巨大な物体が、街全体を押し上げている。

シンジ「僕のせいなのか……僕が槍を抜いたから……。これって……」

カヲル「フォースインパクト……。その始まりの儀式さ。」

（略）

シンジ「僕のせいなのか……僕が、僕が……」

カヲル「君のせいじゃない」

シンジ「えっ」

カヲル「僕が第13の使途になってしまったからね。僕がトリガーだ」

シンジ「どうしよう……ねえ、どうしよう……。カヲル君、僕は……どうしたらいいの？」

カヲル「魂が消えても、願いと呪いはこの世界に残る。意志は情報として世界を伝い、変えていく。いつか自分自身の事も書き換えていくんだ。…ごめん。これは君の望む幸せではなかった。ガフの扉は僕が閉じる。シンジ君が心配すること

はない。」

　13 号機は、二本のロンギヌスの槍を掲げながらゆっくりと天に昇って行く。

シンジ「カヲル君……カヲル君が何を言っているのか、分からないよ！」

13 号機は片方のロンギヌスの槍を振りかざし、自らの胸に突き刺す。強烈な痛みがシンジにも伝わる。

シンジ「うわっ…！」

カヲル「シンジ君は安らぎと自分の場所を見つければいい。縁が君を導くだろう」

　続いて、もう片方の腕を振りかざし、13 号機は二本目の槍も自身の胸に突き刺す。

カヲル「そんな顔をしないで。また会えるよ、シンジ君」

シンジ「カヲル君！」

　カヲルの首に巻いてあったチョーカーが発動し、大量の血しぶきがシンジの目の前を覆う。

呆然とするシンジ。それからシンジはうずくまり、殻に閉じこもった様に身動きしなくなってしまう。

【考察】

二本の槍を抜いたのちに、世界が崩壊していく様を目の当たりにし、シンジは自分が、万能空想なかで起こしてしまったこと、これまで述べてきた様に妄想分裂ポジションの中にとどまり、槍を引き抜いてしまったが、そこでようやく自分の犯した過ちに気がつき、その現実を直面し苦悩していく様を描いている様に感じられる。そして、自身がまた過ちを犯してしまったことに気づき、カヲルというそのとき無二の親友をも喪失し、強い喪失の念に駆られる。

それはメラニー・クラインがいう妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行の様を描いている。妄想分裂ポジションから抑うつポジションに心性がしようとしているが、なかなか行けず、苦悩し、踏みとどまる心性を鮮やかに描き出している様に感じられる。

クラインの考える乳児の心性を改めて伝えると、生まれたばかりの乳児は栄養を与えてくれる乳房と一体となっている幻想を抱き（それを良い乳房ととらえる)、それ以外のものを悪いものと捉え、良いものと悪いものを分割して捉え、

乳房がない時に無いとは受け入れられず、悪い乳房がやってくると捉える。それが妄想分裂ポジションの心性だが、母（養育者）に抱えられる中で、徐々に現実を受け入れるようになり、良い乳房も悪い乳房も同一であるという事実に直面し、自身は良い乳房と一体ではないということに喪失感を、そして悪い乳房と捉え、自身が容赦ない攻撃をし続けてきたことに強い罪悪感を強く感じる（抑うつ不安）といわれる。（クラインは、「愛する対象の喪失は、離乳期に最高潮に達する」と述べている。）そこから妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行が行われていくことになるが、その中で生じる、無価値感、絶望感や悲嘆の念が強く、自身の心の中に受け止めきれないと再び妄想分裂ポジションへと退行してしまう。

　この視点で、ヱヴァのこのシーンについて考察していきたいが、これまでのシンジはその喪失を受け止めきれず、退行する中で万能空想に浸っていったが、カヲル（ある種良い対象）に色々な思いを受け止めていく中で、再びインパクトのトリガーをひいてしまったものの、一方で自身の万能感を放棄し、自身の犯した過ちに気づく。一方でその自分の犯してしまった過ちや喪失（カヲルは良い対象ではなく使徒だったこと）を受け止めきれず、再び退行していくこともできず、

妄想分裂ポジション、抑うつポジションどちらの心性にもいくことができず、身動きが取れず、側からみてなにかもぬけの殻のような状態になってしまった様に感じられる。

マリ「ついでに……ちょっとは世間を知りニャ！」

アスカ「まだ甘えてる！いつまでたっても手間のかかるガキね！」

と言いたくなる気持ちもわかるが、この状態のシンジには生活感のある温かみのある関わりが必要不可欠な様に感じられる。

アスカ「ガキシンジ。助けてくれないんだ。私を。また自分の事ばっかり。黙ってりゃ済むと思ってる」

　このシーンは序の最後を彷彿とさせる。序ではシンジがエントリープラグの扉を開けて綾波を助けるが、Q のこの部分はシンジ自身がエントリープラグの中でうずくまり、アスカが扉を開ける。本当はアスカは、シンジに綾波と同じ様にして欲しかった思いがあるのでは？アスカ自身強がっているが、綾波を強く

嫉妬し、心は弱く、孤独で寂しい。それゆえにシンジの思いを受け止められないでいる。でもシンジのことが好きであるからどうにかしようとしている。

　シンジはその喪失を受け入れられないで、生きる気力を失い、もぬけの殻のようになっているが、シンジの心は悲嘆や絶望、無力感の中でのたうち回り苦悩しているように感じられる。次の新劇場版はその苦悩の中で起きる抑うつポジションへの移行と彼の再生と心の成熟を描いていく様に感じられる。

　そして、シンジにとって最も大切なことは、父親との対峙である。これまでシンジは、良い対象を求めるかのように刹那的な行動を続けてきたが、それはゲンドウの思うがままに操られるような行動とも解釈できる。ある意味、それはシンジが父親の呪縛から逃れられないことを意味している。シンジは父親に対して、愛憎入り混じった激しい感情を抱いており、その感情に伴う歪んだ理想像（父親像）に支配されている。そこから断ち切ることこそが、シンジの心の成熟と解放につながっていくと考えられる。そして、その点が次の『シン・エヴァンゲリオン』では描かれているように感じられる。